

人間禅教団『立教の主旨』第一話

『立教の主旨』の位置づけと背景

人間禅教団 師家 葆光庵丸川春潭



第五総裁 葆光庵春潭老師（著者）

1. 60周年の記念品として「人間禅の精神」を頒布して

昨年は、教団創立60周年、還暦でありました。そこで教団創立の精神を更に噛みしめて、今後の指針を再確認するべく、歴代総裁の「人間禅の精神」「立教の主旨」に対して言及されている文を集め小冊子『人間禅の精神』にして配布致しました。

自分も再度拝読し直して考えるところが多々ありました。また耕雲庵老師、妙峰庵老師を知らない方も教団には多くなり、創業の精神とも云うべき『立教の主旨』を深くまた掘り下げて認識するまでに到っていない方も居られると思い、現時点での小生の『立教の主旨』の認識を、特に最近人間禅にご縁のあった方を念頭において、提唱として講じます。

2. 『立教の主旨』は、絶対であり、不変であるべきか

人間禅の『立教の主旨』はキリスト教で言えば、『聖書』であり、イスラム教であれば『コーラン』であり、こういうものは絶対であり、人によって受け取り方が異なったり、解釈が分かれたりしてはいけないうし、時代が変わっても不変なものであると考えている人が多いように見受けられる。

皆さんは『人間禅の精神』の中の第一世総裁から第四世総裁までの文章をお読みになって、同じことを言われている、異口同音であると受け取られましたか？

私は、それぞれの持ち味があり、家風が出ていると読みましたし、これこそ正脈の法を生き生きと伝承している教団であるということと、人間禅の精神がそこに見られると思ひ嬉しくなりました。

ただし家風というものは磨り上がった人間形成の境涯になってからのものであり、誰でもかってに解釈して家風呼ばわりすることはできませんが、60年の歳月の間の29名を数える教団の嗣法者は、それぞれ素晴らしい個性と家風をお持ちであります。

したがって、教団の師家といっても、『立教の主旨』の解釈・力点の置き方の違い、説き方の特徴は、それぞれであります。例えば、前総裁青嶂庵老師は、「大法に不可思議なし」に思い入れがあり、『立教の主旨』第五段を強調されておられる。それぞれの特徴が出るのが自然であり、したがって小生が提唱する『立教の主旨』は、小生独自の解釈を持ったものであることを最初にお断りしておきます。

3. 『立教の主旨』は、不変なものと時代と共に変遷すべきものの両面を持つ伝法の核心は、時代を超越したものの正法の伝承が基本であり、これは絶対であり不変であります。

また教団内の規則を定めた『要覧』は、人によって解釈が変わってはならないものであります。もちろん合議により時代を反映

させてどんどん変えても良いのですが、『要覧』を変えない限りは、厳然としており、異論を勝手に読み込んで、要覧の規定に反してはならないものであります。

『立教の主旨』には、教団内に対してのみならず、布教・救済として、教団が外に打って出る観点も当然含まれております。したがって、外に打って出る布教は、相手が変われば、やり方が変わるべきでありますから、時代の変化に応じて変えなければならないものも含まれていると解釈すべきと考えます。

『立教の主旨』は、その教団の性格、志向を宣明するものであり、変わらない・変えてはいけないものと、変わるもの・変えなければならないものの両方を含んであり、それをはっきり識別して認識しておかなければなりません。

4. 人間禅教団『立教の主旨』のルーツと時代背景

人間禅の原点は、『立教の主旨』にあり、1940年代の耕雲庵立田英山老師の思想信条を凝縮させたものであります。我々団員は、常にこの原点の確認が必要であります。そして耕雲庵老師の熱い想いを自分の肚にしっかり入れて我が物としなくてはなりません。しかし同時に、耕雲庵老師の時代すなわち、旗本の子に生まれた明治育ちの時代背景から、第二次世界大戦での敗戦直後における「立教」であるということ踏まえ、「今という時代」(地球環境の深化、自殺者3万人超、100年に一度の大不況)に向かって発信される『立教の主旨』の鮮度についても注意深く常に点検し、布教部分についての鮮度を保ち続けなければならないと考えます。すなわち、その時代その時代の人々のニーズ(病根)に適切に対応した「幟旗(のぼりばた)」でなければならないのであります。

5. 耕雲庵老師の考えた人間禅の三つの特徴と四つの新しい宗教の有り様

- (1) 人間味の豊かなこと
- (2) 各自の個性を重んずること
- (3) 神秘性を説かないこと

この三項目は、耕雲庵老師が自ら掲げられた項目であり、「人間禅の精神」として、人間禅が続く限り変わらないものがあります。(この詳細については、明日以降の『立教の主旨』5箇条の本文の提唱において述べます。)

しかし、耕雲庵老師の考えた新しい宗教の有り様についての4項目(①視野の世界性、②原理の合理性、③組織の民主制、④行事の実際性)は、「人間禅教団の基盤」であり骨格になる物であります。この中身については時代と共に変わっても良いもの、変わるべきものが含まれていると考えております。

(1) 視野の世界性

これは新しい宗教の有り様として、民族の守護的な排他性を打ち破って、国境や人種を超越したものでなければならぬと老師が述べられているように、第二次世界大戦の反省と両忘禅協会時代の反省から出てきたものと考えられます。

「自国だけのエゴは許されない」というフレーズは、対象も様相も大きく変わりましたが、当に現在においても、当てはまる箴言であります。新しい宗教教団の有り様として、特に正法を継承している僧伽として「視野の世界性」は1940年代とは異なった観点も加わって、当に今日的課題であります。

教団も創立60周年を期して、海外布教担当師家を設け、いよいよ今年の4月から欧・米・アジアへの布教を開始致します。

しかしもっとマクロに現代を捉えると、今では、人類だけの視野では狭くなっていると考えなければならない時代であります。人類の工業の発展、地球の都市化は、人類以外の地球の生き物にとっては、種の絶滅の危機に瀕してきているという現実を見過ごすことは、「視野の世界性」の箴言の精神からすれば、決して許されないことでもあります。生物学者であり自然を

こよなく愛された耕雲庵老師が、今この世界に生きておられれば必ず、「人類のエゴ」にまで言及されるものと確信しています。人類間はもちろんのこと、地球上のあらゆる生物の共存と持続をこの項目は含むものであると、「新しい宗教の有り様」についての4項目のタイトルの変更はする必要はありませんが、含意は拡張されたものにしなければならないと考えます。更に将来は、宇宙時代の到来も予想しなければならないとも考えられます。

(2) 原理の合理性

老師曰く「奇跡を信じなければ入信できないようなベールを脱して、科学的な教義に立脚しなければならない」と断言されておられます。今でこそこのテーゼは、それほど革新的であるとも感じられなくなって来ていますが、60年前の状況あるいはその後の雨後の竹の子のように出てきた新興宗教の興隆期においては、老師自身云われておられるように、命をねらわれかねないくらいの大胆テーゼだったのでありましょう。

世界的に見れば、いまだに進化論を認めない教義を堅持しているメジャー宗教も残っているのであります。教義も布教の面が入れば、直ぐ時代を反映するものにChange! できなければならないのです。

この時代を反映できる柔軟性をこれからの宗教は持っていなければならない。ではその柔軟性はどこから来るのか？それはふたつあります。①宗教の根源(変わらないもの)が生きて伝わっているかどうか？②科学(進歩し、変わるもの)と宗教の位置づけが明確になっているかどうか？に依拠しており、その宗教の「真贋の尺度」になるものであります。

磨輒庵老師は、本物は常に新しいと云われておられましたが、本物は常に新しさを保つことが出来ると云うことでもあると考えます。

(3) 組織の民主制

老師曰く「宗教家が特権階級であるような封建的錯覚を打破して、万事合議制で行く」の出てきた背景は、両忘禅協会からの反省とそれからの脱皮の宣言であります。この宗教団体内に於ける組織内民主主義の確保のテーゼは、今でも極めて革新的であり、世界でもまれな卓見であると考えます。更に、それを保証する仕掛けとして、耕雲庵老師は「法務と事務の仕分けと独立」を要覧の中にキチット入れ込まれておられます。このお考えの深さを大事にしなければならないと考える次第であります。

(4) 行事の実際性

老師曰く「あくまで人間社会から遊離しないで、盤石の信念と燃ゆる情熱をもって躬行実践しなければならない」

これは仏教の歴史、禅宗の歴史を踏まえ、次に述べます「居士禅」の視点が、新しい宗教の有り様に、無ければならない視点であるとする、これまた耕雲庵老師ならではの卓見であると考えます。

われわれは「わが人間禅教団は、現代社会のマジョリティのニーズに応えているのか？」を検証しなければならないところであります。それは明日からの本文で申すことですが、我々のやろうとしていることは、人間禅教団のためではなく、あくまで四句誓願を転ずるためであり、立教の主旨第一項の「世界楽土建設」が目的なのであります。

そして最後に、これからの本物の宗教者の規範として、耕雲庵老師は「三省願文は団員として不磨の誓願である」と結ばれているのであります。これこそ人間禅が続く限り不変であり、生きて実践し続けられなければならない「誓願」であります。

7. 『立教の主旨』のとらえ方

- (1) 出家僧侶禅から嗣法のある居士禅への新しい歴史的宣言である。

『立教の主旨』の前提を理解しておかなければ、本文を正しく理解できないと考えます。居士の嗣法者は、仏教史・禅史において、耕雲庵老師が初めてのことであり（宗教革命）、他の世界宗教でも未だないのではと思われる革命的なことであります。この前提が人間禅『立教の主旨』を必然的に産み落とし得たのであるとの認識が、この『立教の主旨』全体の理解に必要であります。

(2) 伝法のための伝法から、布教のための伝法への革新である。

居士禅になっても、「伝法のための伝法」である道もあつたが、また、僧侶禅においての「布教のための伝法」の道もあり得るが、「居士禅にして布教のための伝法」が、人間禅の最大の特徴であると認識し、これこそが新しい時代の本当の宗教の形であると強く考えているところであります。

(3) 法輪（法務）と食輪（事務）の峻別（相互独立）を含む組織論を持つ

これは、先にも述べましたが、耕雲庵老師の卓見であります。今までの歴史、就中両忘禅教会の歴史の反省を踏まえた新しい宗教の有り様に付いての指針が打ち出されているのであります。耕雲庵老師のねらいが、時代と共に曖昧になり、風化しないように歯止めを掛けておかなければならないと考えております。

(4) 科学と宗教の違いと役割の明確化を通しての新しい宗教の有り様

自然科学者である耕雲庵老師ならではの明快な歴史的な見解が披瀝され、あらゆる宗教家への規範を示すものであります。ただ、自然科学者であったからこれだけ明確な宗教観が打ち出せたのではないのであります。それは必要条件であるが、最も重要なのは、臨済禅の究極・淵源を完全に極め尽くしている見地が盤石であるから、この「科学と宗教の違いと役割の明確化を通しての新しい宗教の有り様」を明確にすることができた点

をしっかりと見ておかなければならないと考えます。

(5) 新しい世紀の人類の普遍的指針（宗派性を越えた指針）の
開示

人間禅教団『立教の主旨』は、一宗一派の立教の主旨を越えた21世紀の人類に共通する普遍性を有している、と認識しております。すなわち、『立教の主旨』の中の「禅」の代わりに、それぞれの〇〇宗と入れれば、それぞれの教団の立教の主旨になるものであります。

この視点を布教において捉えると、世界楽土建設へ向けての現在の混迷する人間社会をChange!するには、他の宗派の方々の把手供行を人間禅が率先して進めなければ、耕雲庵老師の児孫とはいえない、と考えるところであります。それは、日本国内の各宗禅宗寺院をはじめとし、仏教各宗派、神道などであり、海外では、キリスト教他の宗教各派を対象とするものであります。4月からの海外布教も当然この視点を持つものであります。

以上の5項目が、小生の『立教の主旨』の見方であります。（本日は『立教の主旨』の全体像について述べましたが、明日からは本文の5項目について提唱して行きます。）